



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4425号 2018.6.7 発行

障害者雇用をテレワークで 地方の人材に高い期待

産経新聞 2018年6月6日



北海道旭川市の自宅で勤務し、東京オフィスの社員とインターネットを通じて会話する蓑輪一真さん（価値住宅提供）

職場外で働く「テレワーク」を活用した障害者雇用に注目する企業や自治体が増えている。通勤が難しく、体調が不安定でも、ITを使って自宅や遠隔地で仕事が可能になるからだ。人手不足が進む都市部の企業は、地方で人材を確保する手段として期待を寄せている。

周囲気にせず仕事

北海道旭川市の蓑輪一

真（みのわ・かずま）さん（32）は平成29年12月から、東京の不動産業「価値住宅」の非正規社員として、1日7時間、週3日働いている。インターネットで不動産情報を集めたり、パソコンで間取り図を作成したりするのが主な業務だ。

蓑輪さんは15年ほど前に精神疾患を発症。数年前に一度就職したが症状が悪化し、半年ほどで退職した。その後通っていた就労支援団体のスタッフにテレワークを勧められ、29年秋に旭川市の関連イベントに参加。就職につながった。

パソコンは、同社が必要なソフトなどをインストールして蓑輪さんに貸与。勤務中は東京の同社オフィスとインターネットで常時つながっており、いつでも会話できる。「オフィスにいるような感覚。体調が悪くても自宅なら多少の無理が利くし、周囲を気にせず仕事ができる」と蓑輪さん。できるだけ長く同社で働くのが今の希望だ。

採用難で企業が関心

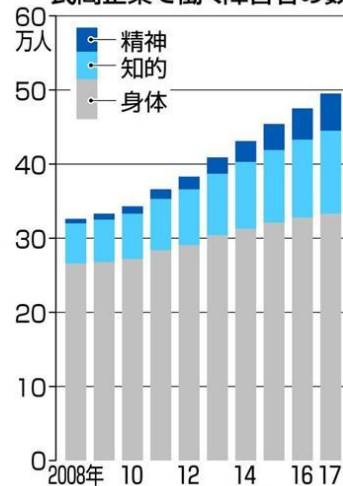
厚生労働省の委託で障害者テレワーク推進事業を行うコンサルタント会社「テレワークマネジメント」によると、障害者の在宅雇用に関する問い合わせは増えている。29年11月に東京都で開いた企業セミナーは120人の枠がすぐに埋まった。

企業の関心が高まっている背景には、法定雇用率（従業員のうち障害者が占める割合）が今年4月に2・2%に引き上げられ、新たに精神障害も対象になったことがある。首都圏では企業が求める障害者雇用枠の社員が不足しつつあり、地方で人材を確保するための手段として、注目が集まっているのだ。

労働人口そのものが減っている影響もある。障害者雇用を義務付けられているのは従業員45・5人以上の企業だが、規模にかかわらず、企業の関心は高いという。蓑輪さんが働く価値住宅も社員は20人未満。高橋正典社長は「これから中小の採用難は強まる。テレワークは必須」と話す。

地元機関と連携で

民間企業で働く障害者の数



※厚生省資料より。各年6月1日時点、法律で障害者雇用を義務付けられた一定規模の企業について集計

行政も注目する。北海道旭川市は28年度から企業向けの説明会を開いて障害者のテレワークを推進。これまでに市外の民間企業2社で21人が採用された。高知県も28年度から推進事業を実施しているほか、福岡県も31年度の事業開始に向け、検討を始めた。

テレワークマネジメントの倉持利恵相談員は「遠隔地の社員の体調変化を心配する企業は多いが、地元の障害者就労支援機関と連携すれば、対応は可能」と説明し、「企業は業務の任せ方を工夫したり、社員の受け入れ姿勢を整えたりすることが大切だ」と強調した。

【用語解説】障害者の雇用

障害者雇用促進法は、民間企業や国・自治体に、一定割合以上の障害者を雇うよう義務付けている。割合は法定雇用率と呼ばれ、4月1日の改正法施行で、従業員45.5人以上の企業は2.2%、国や自治体は2.5%になった。平成32年度末までに、さらに0.1%ずつ引き上げられることが決まっている。法定雇用率が低い企業は行政指導を受けるほか、従業員が100人を超える場合は、不足人数につき1人当たり月5万円の納付金を課される。

48歳「市の臨時職員」、超ブラック労働の深刻 勤続10年以上で年収は190万円に届かず 藤田 和恵：ジャーナリスト 東洋経済 2018年06月05日



昼休みが10分しか取れないことも珍しくないというヨシツグさん（編集部撮影）

現代の日本は、非正規雇用の拡大により、所得格差が急速に広がっている。そこにあるのは、いったん貧困のワナに陥ると抜け出すことが困難な「貧困強制社会」である。本連載では「ボクらの貧困」、つまり男性の貧困の個別ケースにフォーカスしてレポートしていく。



今回紹介するのは、「市の臨時職員として働いているが、市長が変わっても正規職員に登用される見込みもなく不安になっている」と編集部にメールをくれた48歳の男性だ。

「すみません。年度末は時間が取れそうにありません」

「今週、来週ですが、(4月に)異動してきた正職員の指導や、引き継ぎなどがあり日程的に厳しいです」

首都圏のある地方自治体に勤める臨時職員のヨシツグさん(48歳、仮名)に、最初にメールで取材のお願いをしたのは2月下旬のことだった。仕事を立て込んでいたなどの理由で、何度か日程のキャンセルと再調整を繰り返した。ようやく会えたのは5月の連休明け。年度の変わり目とはいえ、非正規公務員もここまで忙しいものなのか。

「忙しいです。昼休みが10分くらいしか取れないことも珍しくありません。弁当をかきこんで終わりです。昼ご飯を食べる時間もないような民間のひどい会社に比べたら、まだマシと言われてしまうかもしれませんが……」

典型的な「官製ワーキングプア」

税務部門で、土地や家屋に関する税額を算定する仕事に携わっているヨシツグさんはさらにこう続ける。

「2月、3月は申告関係の書類が集中して提出され、案件によっては記載内容が正しいかどうかを電話などで確認しなければなりません。4月は記載に誤りがあったり、駆け込み申告されたりしたケースについて、納税通知書の差し替え作業に追われます。年度によっては(正規の)新人職員が配属され、教育係を任されます。残業時間はそう多くはないのですが、日中はつねに時間に追われている感じです」

勤続10年以上。フルタイムで働きながら、年収は190万円に届かない。典型的な「官製ワ

ーキングブア」である。

ただでさえ忙殺される年度末、ヨシツグさんには、さらに非正規公務員ならではの大きなストレスがある。この時期、契約更新のための面接を受けなければならないのだ。「4 月以降も自分はここで働けるだろうか——。毎年、不安で仕方ありません。3月中旬に面接が行われた年もあり、このときは本当に胃が痛くなりました」と振り返る。

ヨシツグさんにとっていちばんの不満は賃金の低さである。

働き始めて1年目、上司から給与の引き下げを打診された。年収ベースで約20万円のダウン。このとき、「(引き下げに)同意するなら契約を更新する」と告げられた。一方的な賃金カットは法律でも原則禁止されているが、失業したくない非正規労働者にとって拒絶するという選択肢はない。ヨシツグさんもはらわたが煮えくり返る思いを押し隠し、賃下げを受け入れたという。

ヨシツグさんは「正規職員と同じ仕事をしているんですから、同一労働同一賃金を守ってほしい」と訴える。

総務省が実施した「地方公務員給与実態調査」に基づくデータによると、ヨシツグさんが勤務する地方自治体の職員の平均年収はおよそ700万円。1800近い自治体のうち上位100団体にランクインしている。残業は主に正規職員が担っているとはいえ、彼の年収は正規職員の4分の1ほど。「あまりにも差があります」。

公務員試験合格は格差の根拠となるのか？

正規職員の中には、難関とされる公務員試験を突破したことをもって格差の根拠とする人もいるが、ヨシツグさんはこう持論を展開する。

「肝心なのは、非正規も正規も日々の仕事に違いはない、ということです。試験に受かったのは事実でしょうが、それは通過点にすぎない。ここまでの格差を正当化する根拠にはなりません」

正規職員の同僚らはボーナスの支給時、さりげなくその話題を避けるなど気を使ってくれるという。職場の人間関係には恵まれているが、それによって賃金格差への不満が和らぐことはない。「(職場には)1000万円プレーヤーもいます。私たちのような臨時職員を安く使いながら、彼らにさらにボーナスを支給する必要がありますか」とヨシツグさんは怒る。大学を卒業後、地元の金融機関に就職。年収は350万円ほどあったが、別の金融機関に吸収合併されたのを機に辞めた。

ヨシツグさんに言わせると、合併相手の金融機関は、地元では融資の回収方法が強引などと評判が悪かったほか、同業者の間でもノルマが厳しいとのうわさがあった。合併に向けた準備は先方の金融機関社員の指示の下で進められ、このときは連日深夜までのサービス残業と休日出勤を強いられた。わずか数カ月で体重が10キロ落ち、これは体がもたないと、退職を決めたという。

現在は両親と同居。自分の雇用形態や給与については詳しく話していない。自宅から電車の最寄り駅まで、バスなどを乗り継いで1時間以上かかるため車は必需品だと言い、車両の維持費や実家に入れる「家賃」などを差し引くと、貯金をする余裕はない。「1人暮らしは到底無理」。

結婚については「願望がないわけではありませんが、今のままでは(相手に)絶対に迷惑をかけます」と躊躇する。結婚する場合、共働きが条件となる。ヨシツグさんは「生活のために働いてもらわなくてはならないというのが、どうしても申し訳なくて。どこかに、“家計を支えるのは男”という古い考えの自分がいるんだと思います」と分析する。

また、子どもを持つことは「ギャンブルでしかない」と言う。「今の仕事だっていつまで続けられるかわからない。その先はもっとわからない。(非正規労働者にとって)子どもを育てることは、危険すぎるギャンブルです」。

現在も定期的にハローワークに通うなど就職活動を続けている。条件は「生活できるだけの給料と、うつ病にならない程度の(業務の)密度」。誰もががむしゃらに働き、仕事で自己実現したいと思っているわけではない。ヨシツグさんの希望は当然で、簡単なことのは

ずなのに、実際にはこれらの条件を満たす仕事を見つけるのは難しいのが現実だ。

「労働組合には不信感しかない」

ヨシツグさんに話を聞く中で、どこまでも平行線をたどった話題がひとつあった。職場の労働組合をめぐる評価である。

実は、ヨシツグさんの給与は今年4月から大幅にアップした。年収で約20万円の増加。自治体の正規職員らでつくる労働組合が市と交渉した結果だという。しかし、彼は「労働組合には不信感しかない。まったく信用していない」と突き放す。なぜなのだろう。

「(勤続1年目で)賃下げされたとき、労働組合に匿名で投書をしたのですが、無視されました。世間で“非正規の待遇がひどい”と騒がれるようになってようやく動くなんて遅すぎます。それに、今回は(一部の嘱託員など)賃金が上がらなかった職員もいます。それなのに、労働組合はまるで非正規職員全員の賃上げを勝ち取ったかのように、ピラなどで大々的にアピールしたんです」

ヨシツグさんによると、給与は今回の賃上げにより、10年前の水準に戻ったにすぎない。一方で職場の労働組合に加入している非正規職員はゼロで、彼自身も組合員ではないという。

私はあえて彼に「正論」をぶつけてみた。

——労働組合は基本、組合員の利益のために賃上げや労働環境の改善に取り組む組織である。そして賃上げは本来、働き手が労働組合に入るなどして、自らが要求して勝ち取るものだ。今回、労働組合は自分たちの『取り分』を削り、組合員ではない非正規職員のために賃上げを実現させたのであり、ヨシツグさんは、組合に入って声を上げることもせず、組合費も払わず、利益だけを享受したということになるのではないか——

すると、ヨシツグさんはこう反論した。

「労働組合なんて、入れるわけないでしょう。そんなことしたら即雇い止めです」

「非正規」で働くことの現実

十数年前、私が非正規労働者の過酷な働き方について記事を書くと、正社員を中心とした、主に企業内労働組合の組合員から「まずは正社員が直面している賃下げや不当解雇の問題について書くべきだ」「正社員の待遇が上がれば、それと連動して非正規社員の待遇も改善される」と指摘され、議論になったことが何度かあった。そして現在——。本音は知らないが、さすがに表立ってそのような物言いをする労組関係者はいなくなった。

多くの労働組合が非正規労働者の組織化や待遇改善に取り組むようになった「変化」を、私は肯定的に眺めてきた。しかし、当の非正規労働者から見える景色は少し違うのかもしれない。長年にわたり無視され、冷たく見放されてきた恨みは簡単に払拭できない。「10年前の賃下げを行ったのは自治体であり、労働組合ではない」という「正論」はヨシツグさんにとってはさして重要ではないのだ。

ヨシツグさんと会ったのは、彼の希望もあり、職場の最寄り駅からは5駅ほど離れた場所だった。理由は「職場の人に見られるとまずいから」。

非正規労働は自由に選べる多様な働き方のひとつなどというのはきれいごとだと、あらためて思った。賃金カットにノーと言うこともできない。自らの給与について親にさえ屈託なく話すこともできない。仕事の不満を語るのにも人目をはばかり、クビが恐ろしくて労働組合に入って権利を主張することもできない——。これが非正規で働くことの現実である。

この日の天気は土砂降り。視界不良の中、マイカーで遠い家路につくヨシツグさんを見送った。

筋ジストロフィー 「生きよう」希望の映画完成 患者の蔭山さん小説が原作、京大サークル制作 13日、三田で上映会 /兵庫 毎日新聞 2018年6月6日
蔭山さん「夢実現、うれしい」

蔭山武史さん（左）に映画について語りかける雪だるまプロの橘綾美さん＝神戸市北区で、栗飯原浩撮影



神戸市北区の筋ジストロフィー患者、蔭山武史さん（41）の短編小説「あの日の君は泣いていた」を原作に京都大の学生映画サークルが映画をつくり、13日に三田市内で上映される。蔭山さんは「映画から生きる希望と勇気を感じ取ってほしい」と願う。【栗飯原浩】

蔭山さんは5歳で全身の筋肉が徐々に衰えていく難病の筋ジストロフィーと診断された。29歳の時に肺炎になり、気管切開で声も失った。わずかに動く顎（あご）などでパソコンを操作。闘病記をつづったり、楽曲の作詞や俳句、短歌、詩などを創作したりし、フェイスブックなどで発信し続けている。

「あの日の…」は約10年前に書き上げ、2016年11月に自費出版した作品集に盛り込んだ。主人公の男性が通う高校に転校してきた女子生徒には虐待でできたやけどの痕が残る。男性は思いを寄せるが、女子生徒の体と心に負った傷を受け止めきれなかった。女子生徒は手紙を残して命を絶つ。男性は最後に言葉を交わした「あの日」を胸に刻み、それでも未来を生きていこうと誓うーというストーリーだ。

自身の小説の映画化が夢の一つという蔭山さんが出版と同時に映画監督や映像制作会社など約100カ所にメールで依頼し、京都大の学生らでつくる「自主映画制作サークル 雪だるまプロ」が応じた。

脚本や監督を担当する京都女子大4年の橘綾美さん（26）と相談しながら脚本を練り上げ、昨年3月から撮影開始。出演者や撮影場所の都合で設定を高校から大学に変更したものの、蔭山さんが22年間入院していた兵庫中央病院（三田市）に近い公園もロケ地に。主人公が思いを寄せた女性がやけどの痕を見せるシーンは、割愛しないで盛り込んでもらい、今年5月末、48分の映画が完成した。

試写を見た蔭山さんは「切ない物語にもかかわらず、若者の心の動きをうまく演じてくれた。カメラアングルなど撮影技術も素晴らしい」と感激し、「夢が実現できてうれしい」とパソコン画面に記した。橘さんは「蔭山さんの原作には『つらいことがあっても乗り越えて生きよう』というメッセージがある。生きる意味を考えるきっかけにしてほしい」と語る。

上映会は三田市けやき台1のイオンシネマ三田ウッドタウンで13日午後6時半から。定員100人で希望者が多く、再上映も検討している。映画の主題歌「雨の雫（しずく）」を歌う兄弟デュオ「ちめいど」のミニライブもある。入場料1800円（高校生以下1000円）。問い合わせは蔭山さん方（078・952・1767＝ファクス兼用）。

障害児施設元職員を追送検 わいせつ容疑 12人被害 共同通信 2018年6月6日

大阪府内の障害児施設の入所男児に対する強制わいせつ罪で起訴された元職員一丸昌弘被告（27）について、府警捜査1課は6日までに、他の児童にもわいせつ行為をしたとして、強制わいせつの疑いで追送検した。5月31日付。

捜査1課は、2014年10月から17年11月にかけての、当時5～14才の男児ら12人への強制わいせつなど計14件の被害を捜査し、暴行と傷害2件を含む5件を立件。「恥ずかしいことをしたら言うことを聞かなくなった」と容疑を認めている。追送検容疑は、14年11月、当時12歳の入所児童の下半身を触った疑い。同容疑者は入所する男児の下半身を施設内で触るなどしたとして、3月に強制わいせつの疑いで逮捕、起訴された。施設を運営する社会福祉法人「日本ヘレンケラー財団」（大阪市阿倍野区）を巡っては、別の障害者施設で、5月に入所者の女性が入浴中に大やけどを負い死亡する事故が発

生。府警が業務上過失致死の疑いもあるとみて捜査している。

死亡の5歳、ノートに「おねがいゆるして」両親虐待容疑 朝日新聞 2018年6月6日

東京都目黒区で虐待を受けたとされる船戸結愛（ゆあ）ちゃん（5）が3月に死亡した事件で、警視庁は6日、すでに傷害罪で起訴されている父親の無職船戸雄大容疑者（33）を、保護責任者遺棄致死の疑いで再逮捕し、母親の優里容疑者（25）も同容疑で新たに逮捕した。同日発表した。2人とも容疑を認めているという。

捜査1課によると、2人は1月下旬ごろから結愛ちゃんに十分な食事を与えずに栄養失調状態に陥らせ、2月下旬ごろには結愛ちゃんが衰弱して嘔吐（おうと）するなどしたにもかかわらず、虐待の発覚を恐れて病院を受診させることをせずに放置。3月2日に低栄養状態などで起きた肺炎による敗血症で死亡させた疑いがある。

雄大容疑者は2月末ごろに結愛ちゃんを殴ってけがをさせたとして傷害容疑で逮捕、起訴されていた。

結愛ちゃんの体重は死亡時、同年代の平均の約20キロを下回る12・2キロだった。部屋からは、「もっとあしたはできるようにするからもうおねがいゆるして」などと結愛ちゃんが書いたノートが見つかった。毎朝4時ごろに起床し、平仮名の練習をさせられていたという。

都や一家が以前住んでいた香川県などによると、結愛ちゃんは同県で2016年と17年に計2回、県の児童相談所で一時保護された。2回目の保護が解除された後の同年8月末には、病院から「こめかみ付近と太ももにあざがある」と児相に通報があり、結愛ちゃんは「パパに蹴られた」と話したが、県は一時保護の必要はないと判断していた。

一家は今年1月に目黒区に転居。県の児相から引き継ぎを受けた品川児相が2月9日に家庭訪問していたが、優里容疑者とは会えたものの、結愛ちゃんには会えなかったという。

雄大容疑者については、結愛ちゃんに暴行を加えてけがをさせたとして香川県警が昨年2月と5月に傷害容疑で書類送検していたが、いずれも不起訴になっている。

目黒虐待死 被害女兒、大学ノートに「反省文」 毎日新聞 2018年6月6日

「しっかりするから、もうおねがいゆるして」
東京都目黒区で3月に船戸結愛（ゆあ）ちゃん（当時5歳）が父親から殴られた後に死亡した事件。警視庁捜査1課によると、結愛ちゃんは毎日早朝、1人で起きてひらがなの書き取りをするよう言われていた。鉛筆で記された書き取り用の大学ノートには、「反省文」のような内容もあり、死亡する10日ほど前の2月20日ごろまで続いていた。一例は次の通り。

反省文の内容 ママとパパにいわれなくってもしっかりとじぶんからもっともときよりかあしたはできるようにするから もうおねがいゆるして ゆるしてください おねがいます

ほんとうにおなじことはしません ゆるして きのうぜんぜんできてなかったこと これまでまいにちやってきたことをなおす これまでどんだけあほみたいにあそんだか あそぶってあほみたいだから やめるから もうぜったいぜったいやらないからね ぜったいやくそくします

成年後見ホットラインを開設...本庄市 読売新聞 2018年06月06日 全国初、官民協働で

本庄市は今月から、家裁が選んだ後見人が、認知症や知的障害などで判断が十分でない人の財産や権利を守る「成年後見制度」についての市民の相談を無料で受け付ける官民協

働のホットライン（フリーダイヤル0120・235・833）を開設した。市によると
官民協働のホットラインは全国初という。

同制度を巡っては、後見人が被後見人の生活状況を十分に把握していないなどの問題や
トラブルがあるといい、ホットラインは、制度を利用するのが適切かどうかなど利用前の
可否や手続き、利用後のトラブル（係争中を除く）などについてアドバイスを行う。

同市では市社会福祉協議会が月2回、相談窓口を開設していたが、年10件程度の利用
しかなかった。市は一般社団法人「後見の杜」（東京都）が、総合警備保障（同）とともに
ホットラインのモデル事業を計画していることを知り、受け入れたという。

ホットラインは、システム構築やコールセンターの設置・運営を総合警備保障が、オペ
レーターの養成などを後見の杜が受け持つ。平日の午前9時～午後5時に受け付け、本庄
市在住か、同市に判断力が不十分な家族がいる人が相談できる。

同市地域福祉課は「後見人はいったん申し立てると、代えることが難しく、多額の報酬
が必要になるケースもあり、利用を考える人はホットラインに電話を」と呼びかけている。

有効求人倍率 熊本、鹿児島が過去最高 宮崎は1.50倍で2番目 医療、福祉など人 手不足 4月 /宮崎

毎日新聞 2018年6月6日

厚生労働省が発表した4月の有効求人倍率（季節調整値）で、熊本、鹿児島両県は統計
を取り始めた1963年以降で最高、宮崎県も過去2番目の高水準になった。3県とも医
療、福祉分野の求人が伸びており、高齢化による福祉施設などの需要増と人手不足が浮き
彫りになっている。【城島勇人】

熊本県は2016年4月の熊本地震以降、長引く避難生活なども重なって医療、福祉分
野の求人が増加。今年4月の有効求人倍率は1.74倍に上り、20カ月連続で全国平均
を上回った。新規求人は前年同月比8.9%増の1万6050人。医療、福祉（521人
増）▽複合サービス（263人増）▽運輸、郵便（207人増）――など18産業中14
産業で前年同月を上回った。

熊本労働局は「地震で損壊した家屋の公費解体がほぼ終了して建設業の求人数は落ちつ
いてきたが、今後1年は1.6倍半ば前後の有効求人倍率が続く」とみている。

鹿児島県の有効求人倍率は1.27倍で昨年12月と今年2月に並ぶ過去最高。新規求
人は前年同月比6.4%増の1万5213人だった。産業別では医療、福祉（875人増）
▽卸売、小売（198人増）▽学術研究、専門・技術サービス（100人増）――など。

鹿児島労働局は「医療、福祉の新規求人は30カ月連続で増えている。有効求人倍率は
今後も高い状態が続くだろう」としている。

宮崎県の有効求人倍率は過去2番目の1.50倍だった。新規求人は前年同月比8.5%
増の1万558人。産業別で伸びたのは製造（204人増）▽建設（199人増）、▽医療、
福祉（165人増）――などで、18産業中12産業で増えた。

宮崎労働局は「製造業や派遣、請負などのサービス業で人手不足が顕著だ。有効求人倍
率は今後、過去最高を更新する可能性もある」としている。

木下大サーカス会場を花で彩って 県内福祉施設がプランター贈る

山陽新聞 2018年6月6日

9日に初日を迎える木下大サーカス岡山公演（山陽新聞社主催）の会場を彩ってもらお
うと、岡山県内の知的障害者施設など14福祉施設でつくる「花の会」は6日、各施設で
育てた花のプランターを天満屋ハピータウン岡南店特設会場（岡山市南区築港栄町）に届
けた。

代表してももぞの福祉園（同市北区粟井）の関係者らが訪れ、ベゴニア、マリーゴールド
など色とりどりの花7種類を植えた計100鉢を贈った。木下サーカスと山陽新聞社が

県と岡山市を通じ、福祉施設に計1万枚の招待券を贈っており、花はそのお礼。

色とりどりの花で彩られたプランターを手渡す福祉施設の関係者(右の2人)＝岡山市南区築港栄町

9月3日までの公演中、サーカスの舞台となる「赤テント」の周囲に飾る予定。ももぞの福祉園職員の光畑翔太さん(31)は「頑張って育てた花で会場を華やかにしてもらいたい」、木下サーカス営業推進本部の和田めいさん(23)は「たくさんのお花をもらい、ありがたい。演目と同じように会場のお花も楽しんでほしい」と話した。岡山公演の前売り券は大人2800円(当日券3200円)、3歳～中学生1800円(同2200円)など。問い合わせは事務局(086-265-0081)。



諦めずに挑戦する大切さ語る 新潟 パラ金メダリスト石井さん講演

新潟日報 2018年6月6日

「挫折や失敗をしても、いつか必要だったと思える日が来る」と語る石井雅史さん＝5日、新潟市中央区

北京パラリンピック自転車競技の金メダリスト石井雅史さん(45)＝神奈川県＝の講演会が5日、新潟市中央区のホテルであった。事故で競輪を引退後、障害者スポーツとして競技を続けてきた経験を踏まえ、諦めずに挑戦する大切さを呼び掛けた。



講演会は県人権擁護委員連合会の定時総会に合わせて開

かれ、県内の委員ら約130人が参加した。

石井さんは2001年、競輪の練習中に事故で高次脳機能障害を負い、左脚にまひが残った。リハビリや練習を重ね、08年の北京パラリンピックで金、銀、銅メダルを獲得。ロンドン、リオデジャネイロ両大会で入賞し、現在は20年東京大会に向けて練習している。

講演では、事故後に自転車で真つすぐ走れなくなったり、記憶に障害が出たりした状況を紹介。自転車を続けられたのは家族や友人らの支援が大きかったとし、「挫折を乗り越えたからこそ感じられる喜びがある」と振り返った。

自転車で打ち込んでいた時は周囲から「目が生き生きしている」と言われるという。「それぞれの個性や能力をどんどん生かせる社会になれば、私たち障害のある人にとってはありがたい」と語った。

記者有情 セクハラと心の傷 /福岡

毎日新聞 2018年6月6日

性暴力被害者のうち心的外傷後ストレス障害(PTSD)を発症する割合は自然災害の被災者より高い。セクハラ問題について久留米大の大江美佐里精神科医に取材中、米国のある研究結果を示すグラフを拝見した。大江医師はこうした性暴力による心身への影響を警察学校で未来の警察官にも伝えている。セクハラ問題を巡っては、「触られてないのに大げさ」「イケメンならいいだろう」という心ない言葉がインターネット空間で飛び交っている。大江医師によると、セクハラや性暴力で深く心が傷つくのは、対等の人間ではなく、ないがしろにしていい存在として扱われるから。性別にかかわらず誰もが尊重される社会になるよう、私も種をまきたい。【安部志帆子】



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行